

「異」なる功臣
—「夷酋列像」の制作と受容—

春木 晶子 北海道博物館

松前藩士・蠣崎波響(1764-1826)は、寛政2年(1790)、「夷酋列像」と称する「蝦夷」の「酋長」たち12人の絵を手がけた。その絵は翌年京都にもたらされ、同地の文人や貴人に披露されて評判を得たのち、光格天皇の叡覧に供された。波響は「夷酋列像」を2組制作したとされ、《夷酋列像》(フランス・ブザンソン美術考古博物館所蔵)と《御味方蝦夷之図》(函館市中央図書館所蔵)が、その一部とされる。平戸藩主・松浦静山をはじめ、大名たちがこれを所望し、複数の模写がつくられた。

本発表では、波響が制作した「夷酋列像」と、その下絵、模写、関連資料を比較・分析し、諸本の制作と受容の様相を明らかにする。そのうえで、以下の特徴に注目し、絵画史における意義を考察する。

まず、「夷酋列像」には、秋田蘭画派の画家や司馬江漢による「洋風画」に通じる要素が複数確認できる。なかでも、人物の面貌や、西洋風の衣服に見られる陰影の表現が注目される。この表現は、諸本間で差異が大きい。模写をした絵師のなかには、この描き方に習熟していないものが含まれている。また、《夷酋列像》の序文で、松前広長はこの絵を「精妙」と評している。この語は、司馬江漢が『西洋画談』で「西洋画」を評して用いた語でもある。「夷酋列像」は当時、同時代の「洋風画」とともに、「西洋画」の新奇な描き方を取り入れた絵とみなされていたと考える。

他方で、「夷酋列像」は、「功臣図」の系譜に連なる。「夷酋列像」の付属文書『夷酋列像附録』には、本図が「麒麟閣の挙」(漢の宣帝が功臣11人の肖像を麒麟閣に飾った故事)に倣ったとの記載があり、「夷酋列像」に寄せられた文人たちの賛辞文には「凌煙閣」(唐の太宗が画家の閻立本に功臣24人の肖像を描かせ凌煙閣に飾った故事)の語が見出せる。さらに画面構成や人物の姿勢は、「功臣図」を題材とする明清の人物版画に通じる。「夷酋列像」が人物の姿勢の手本とした月僊の『列仙図賛』所載の仙人もまた、皇帝や君主を助けた「功臣」の一種と見做し得る。

「夷酋列像」の「夷酋」は、一方で、「西洋画」の描き方によって、「異」なるものと、他方で、伝統ある描き方によって、「功臣」と、結びつく。この両義的なあり方は、松平定信周辺の絵画制作を想起させる。定信は、「夷酋列像」の模写や、模写を所持した大名たちと、密接に関わっていたと考えられる。「夷酋列像」を、この定信の絵画観や、定信周辺の絵画制作と照らして、考察する。

(はるぎ・しょうこ)